

参加者や父母といつしょに写っている写真が残つてゐる。カメラが普及する以前だつたから、この家の写真はごく少ない。「フジ」の写真も二、三枚しかない。

当時私は、中・高校生で、日曜日はバスケットボールやラグビーの試合を行つていて、編集には参加していなさい。歌会もたまに参加しただけだった。

一度、佐藤佐太郎氏が東京歌会に来られたことがあって、母にとにかく来なさいと言わされて出席したのをおぼえている。「心の花」以外の歌人と話をしたのはこれが最初だと思う。

昭和三十四年十月八日、その「ろノ五号」時代に父・治綱が急逝した。私の誕生日である、共立女子大の図書館で階段を踏み外して転落、内臓破裂。四日ほど入院して急逝。父はまだ五十歳。私は二十歳だった。葬儀は安藤寛さんがすべて仕切つてくださった。参列者の方々を前に、早稲田の制服姿で私が謝辞をしゃべつている写真が残つてゐる。

最近、定年を迎えた夫婦が、田舎に引っ越して農業をしたり、物価の安い海外に家をもとめて引っ越す、などという例を、週刊誌などで見る機会が多くなつた。最後の引っ越しで新しい人生を、ということなのだろう。單に家を替える発想がわきにくいが、気軽に家を替える

国民もいる。私が知つてゐるのは、オランダ人である。オランダ人は、ごく普通に家を替える。ライフスタイルに合わせて、少なくとも三、四回は家を替える。子供時代の家、新婚時代の家、自分たちに子供ができるときの大きめの家、子供が自立していった後の夫婦の家。そして医者が近くにいた方がいい年齢になると老後施設へ行く。この間に職業をかえるとか、転勤とか、人によつてさまざまだが、じつに気軽に家を替える。彼ら独特的の合理主義らしい。

合理主義といえば、オランダで驚いたことがある。スープなどに行くと、黄色人種の子と黒人の子、二人の養子を連れた夫婦をよく見かけた。白人の子は自分の子を育てたからもういい。今度は、黄色人種と黒人の子をそだててみたい、というのだ。たぶん、自分たちが元気で、大きめの家に長く住みたい場合は養子を育てる、ということなのだろう。親子じつに仲良しで、楽しそうに買い物をしていた。

もう一つ、家に関することで、オランダで驚いたことがある。二〇一二年、文化交流史としてオランダに行つたとき、一九九二～三年にかけて住んだ家をたずねてみたのである。つまり三十年前に一年間住んだ家の現在が知りたくて、ライデン市の隣町・フォルスコーテン市まで出かけたのである。幅三十メートルほどの運河が近くにある五、六十坪のレンガ建ての家だ。（以下次号）